

2019年6月23日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「暴力への依存」～沖縄「慰霊の日」を覚えて～

聖書：詩編62:11～13

今年も沖縄「慰霊の日」を迎えた。平和記念公園内では「沖縄全戦没者追悼式」が行われる。東京から大臣が来られて追悼の言葉を語るが、その言葉が毎回のようによく響かない。

作家の目取真俊の著書に、『沖縄「戦後」ゼロ年』がある。「戦後 60 年」の節目の年に出版されたものだが、その内容は、沖縄に「戦後」は来なかった。そして「本土」が 60 年の「戦後」の平和を謳歌する中、基地は沖縄にとって現実のこととして存在し続け、朝鮮、ベトナム、アフガン、そしてイラクに兵員を供給し続けた。沖縄人自身も、米軍に協力するという形で戦争協力し続けてきたのだ。それはこの 60 年間、沖縄に一手に基地を押し付けてきた大和人の責任でもあると問う。著者の怒りは、基地存続に手を貸し続けてきた沖縄人同胞にも向かい、沖縄に平和は来なかった、沖縄に「戦後」はなかった、という現実を見ようもしない、沖縄人にも問うていく。この著書からも問いかけるように、いわゆる「戦後」の沖縄を見ていないかのように語る追悼の言葉は、沖縄の人々の心情を余りにも無視した言葉にしかならない。

では教会はどうか。沖縄の歴史、軍事基地化の現状に向き合ってきたか。教会は、軍事基地化を容認し、支えて来たのではなかったか。あるいは見てみぬふりをしてきたのではないか。…いやそれ以上か、それ以下かの分別さえ戸惑ってしまうが、その歴史、現状に向き合うということの意味さえ分からずに、ただ「ハレルヤ」と個人の救いというもののみで没頭して来なかったか。メガチャーチこそが教会の力、神の力として見て来た者ではなかったか、教会もまた問われている。

このような現状には、人間は「暴力への依存」が根底にはあるということ。この社会は常に「暴力への依存」が存在する。力を持つことが安心感へと繋がると信じている。だから戦争という暴力にどんなに痛めつけられても、再びこの国は軍備強化へとひた向きになる。沖縄から再び、琉球の時代と変わらずに搾取をし続けて行く。力が力を生むことに一生懸命になる。キリスト教会もまた、日本で毎回話題になるのが「クリスチャン人口1%未満」という数への不安を常にあげて、マジョリティ化を目標にあげる。クリスチャン人口が増すことに、そこにこそ救いがあるかのように目標にあげる。私たちは弱さゆえに「暴力への依存」があることを認め、詩編の言葉に心傾けて行きたい。

この詩編の言葉は、イエス・キリストの姿に置き換えても良いかと思う。イエスは、暴力的な支配者となるよりも、むしろ苦難のしもべとなることを選ばれた。力によって擁護された、武力によって勝ち取った正義よりも、むしろ死に至るまでの慈しみを私たちに現してくださった。キリストのお姿を見る時、如何に暴力的なものが神とかけ離れたものであるか。あのキ

リスト誕生の出来事と十字架と復活の出来事に、神の力を見、神の慈しみを見ていきたい。
人間が常に、上に、上にと這い上がろうとする中で、神ご自身は、下に、下にと降りてくださったことを、私たちは見逃してはいけない。(神谷)